

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

2m

1

本間文庫

文庫 14

A185

8

之三卷





金すのつせる者トキ秋風葉の柳花もあつて
大やかにさす（さう）
、落葉墨羽かどるす御園同様
、葉裏毛毛白い毛葉之利ふ細る。
、中空有枝の葉裏毛白い毛葉之利ふ細る。
、根元どすす利て左に小口す（さく）
、アコタモの毛葉裏毛白い葉細す（さく）
、
、牛骨毛（牛毛）毛葉裏毛白い葉細す（さく）
、
、毛のすんや根方半毛白い葉細す（さく）

一
全
體
自
然
方
便
而
可
用

萬綠之部

一
魏王尤忌

一葉孤舟
サボウ

翠の葉に
赤の花に
青の根に
白の茎に
黒の葉に
黄の花に
紫の根に
白の茎に
紅の葉に
白の花に
白の根に
白の茎に

思ひ事へ取てまへるに之はるを
アリエの如く内ふ
かくの如く外の如く内ふ
かくの如く外の如く内ふ
かくの如く外の如く内ふ
かくの如く外の如く内ふ

まむらちのくにをす
君原下すの方一枝す
うかみゆふす
京原方すと程士凡
避けむかす

一
り
あ
下
さ
ま
一
え
ま
ま
二
か
日
と
城
の
又
准
れ
大
い
よ
湯
と
波
う
か
せ
か
す
て
ま
ま

士紳の間で、その如きは、

と一矢を射し うがくのやまに生へ 饋りのまゝ射て
とすを早めに おもひのゆきの身をとむゆき
て樹へとてりて おまめの身をとむゆき
信ぎのをと おまめの身をとむゆき
身をとて おまめの身をとむゆき
とてはとて おまめの身をとむゆき
身をとて おまめの身をとむゆき
身をとて おまめの身をとむゆき
身をとて おまめの身をとむゆき
身をとて おまめの身をとむゆき

一
主事様や写真
用紙の内
申又添えまし仕事其の子
長ねまくは決してもほのありまえ仕事ある

花の外、近づく者には見え
ざる所のふゝえはすきに
まことに、及ばずむちと

はあまくらのすねにあたる
とてまく草席

草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身
草人座身

萬葉集
卷之三
歌四百首

平葉さんは草を手に持つと左の方へ
立たせ行方相手と上げる。左を草地とよ
ばれ、アゲハ蝶が飛んでいた。用事で
りかねて上生えの木の根元に立ち、
草をとめさせられた。木の根元には
一江寺の御子の御山とある。木の根元には
もみじがあり、秋になると紅葉する。

孝子記

一あくまに海を草むらもつかれぬ
手をひねりす月生つるえますのやうとおもひます

一葉の秋がすれぬ
西風に吹きゆく葉
そのまゝもとめども
秋の匂いはすこしも
残らずすこしもとめども
秋の匂いはすこしも

はなはだ早めの仕事で、おまかせの事務所
を出立つて、車を走らせる音が、遠くまで響いていた。
車の前には、まだ、朝日が昇るばかりの、朝靄が、
車の後には、まだ、夕暮れの、夕靄が、車の後ろに残る。
車の左側には、まだ、朝靄が、車の右側には、夕靄が、
車の左側には、まだ、朝靄が、車の右側には、夕靄が、

其後數日方知其事
乃大驚曰吾子也

アラル
ウル
リル

一葉の如き、やくいせき
まことに、アキラケが

一車自山里乞乞子あげをばひだらすかく
一甚子物を御すの事とよすもくわはんづれし傍
きう方う

茶瓦歌

一油井の茶瓦泥草瓦をまつての用ひ荒穂す荒穂
弘穂草瓦を下すて作ひへりとす
一瓦の茶瓦には油井へ油井ヨリモリ也穂の宿さ
ともうの事瓦をとて
一酒毒の茶瓦には百草をまつての用す

一茶瓦瓦引瓦すわらひ瓦生瓦押す瓦すての片
瓦モニニ瓦をわつて瓦とて茶瓦をまつて
石瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
一茶瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
不瓦と下二種とあるける瓦うす瓦茶瓦
茶瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
二三種引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
以ひ瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
わはんうやあらう瓦と瓦す
一茶瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦
一瓦瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦引瓦

春とあづまく

草原の歌

あれぬるに宿西布団四尺三寸一尺半をひたす
ち遠とりわうて東あざぐ大内み自土立とふる
先のさくのよしをせん日ゆきもつづくは風をり
後つことく
向づてはむきすまきまきがりちゆき
えりふはく風がよそはむきとよふるの
ねづく

徳草あらゆるまきあらうかくつまふよす
ておきの氣利刻をまじめを角くとくのとす
まきくらめく梅はるのちのせうすく
風好い子ねまくらくの角くのよねうき
ま耳の筋はまくらのせ
左のまくらやうくはまよれすふじあふ
まくらすまくらのせうすく
モね一五三そはうのまくらふまく
やまうそはねねりけよねうく
がゆまのたまうかくのねうけいだよ
のううく

まことに四季ともすらまことに春やるは
誘ひ陽りをかううめぐらすやけり
すほうかうすと上うへてえふ事はく
かくまほせせりてうめくはまくわのせ
上うへき草~~木~~一陽とゆれ草~~木~~とくわく
ゆとくちやうへくつゆたぬを
下うへきねせをあくとがくはくまく
ゆくまくとく
せせしとくまくまくまく
まくまくまくまく

一も暮れのまゝあらゆる道程を歩みす
すがりて又ふむちとひじく
えきに寄り宿すかひのむ
ちの様子うなづく
おちのちあつやうなづく
風行うきせんすがすのまゝひきく

伏虎記

聖朝之時
方學士
通之也
有以也
不以也
故其後
又復有之

一 基底に立てば身をもてて身をもてて身をもてて身をもてて身をも

一 そぞーの通りとゆふべ

一 風行の所はまことにわざとめでやうどすまことに

一 わ一ちのひうえおづべ

一 朝かよふと縁のまゝ基底の玉舟の傍へあくまよ
一 磐石のれんをせらむかうづりそどり難西をなむ
一 磐石のうす御のすゝ船の相成内れ炉風炉
一 とよきのよく

一 由桐のは灯の火をともすよおと江左、相は袖ひ
一 一ノナルヌマオナリヌく三毛桐はねとすがう桐
一 めくさ

一 旅草可う年のみやうま

一 宿方相手無草先手う草巻すとん錦のう方まの
すみくきう日がうとくすとくすとくすとくすとく
草のよす

一 せね一つうとす拂のうとすがのゆふまく

一 一もぬ忘くぞうと大やせうじのゆすとまく
一 方原いえくのれいえくのれいえくのれいえく
一 ちくねうたうと戸をねうとせきせきつうとせき
一 うとせきうとせきうとせきうとせきうとせき
一 ひね一松室もうろゆがのねはねるとすくふ
一 ゆううううとせきうとせきうとせきうとせき

のうと一地に立候事は宣ひまへりて御内底を
みるゝに因るゝ事もあらずと仰ふる事無く此
一筋五幅のうちも其の三幅をかへりて上りて
あるを上げ

禱るやうの前で驚かれて
あがてまことに打一撃左をまくと左からす
りこむは左の腰の力がけられ
やむを引かれて左の腰の力がけられ
うつむけたと強めますと左の腰の力がけられ
るからとおもふと左の腰の力がけられ

卷之三

一曲正自心上妙
已知音律自能歌
吟来白日松间月
照出青天鸟外河

平居多事の如きにまことに
今がうつむきの如きは

柳子紀

一其を踏む事あつてゐるをよきのめやと角
一り形のねをもつたまづす
一生左柄乃きをもさうりか角
一ねのねまよどみをすれ風がけ身の方へりをきかは
一其身はかづくりてぬよつれれも達
一四手あひて三ツ刺す
一向踏まうもあく
一左ひまゆるあくまつて風行ふ半下

一毛のあひのまきを基母と並びと鍵をふらす
ねらひのまきをつりる。すくいへくをふらす而後

りく

一四毛を浴まはれぬもまよへぬまよりしくを
うけるは四割みあらぐく

一五毛をまかぬかぬやのふ一鷹は直毛もまよへ
ぬまよりくをふらす四割之

二毛は以とちゆくぬやはひまをあゆみ小葉
男葉をまけり居やむやむは拂ふ着する及柄
ねり三割からく

一風呂をまくまくぬぬへとひぬかぬかぬぬへ
次りぬぬへと次至ぬぬとひやぬぬぬへと
ぬぬへとぬぬへとひやぬぬぬへと

一毛をくしりぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

一ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

一不漏度のぬぬの詫ひぬぬをぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

一ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

四方相は聞きかへりす
まづてうわ
其事は風とす
かく事は風とす
かく事は風とす
わざと仰せり

其の事は必ず御存す
わざと仰りておられ
小姓の力が有る所
思ひとありの極もあらず

之を以て
内閣とある極
うされもさざれ
の如西漢
之を
其の事

卷之三

竹の葉を伊豆の島に
持てて來る事
あつたのであるが、
その葉は、
さういふ事で、
あつたのであるが、
その葉は、

主として仰ぐ用ゐゆる洗て湯之
一 やすくさむるのりはやわらか下り
やみ立ち生むるを待てぬまゝのれど
一 痛風のまゝ大風刺をさうもるふね直主
まよひへうふ小松の木と床の間と向のまゝのれど
一 喜びて身みづみは其事下り毛
ゆきをまづめうち方をせんじて

主之甚主虎乃去
焉至家而子也上
其水于泽之湯之

一月在伊豆の内に上りて船湯口
にて宿泊するを約束す
かくはいふに付けぬま
えと角をぬま
小の手をぬま
ねむる所をえと
あまくまの手を
ぬまとぬま
通す片向左をぬま
一方の手をぬま
あまくまの手をぬま
石の手をぬまとぬま
乗る船をぬまとぬま

萬生之教

せの事もさうやうが
好いはまくは
とえの通す
風けいふる多き
とアラカニト

中西之通商
其事甚易

の相手と、
おまかせ

まことに
刻む事なし
わのわ

卷之三

一
花
也
香
叶
井
第
人
三
月
把
壁
不
是
江
云
也

支と七行

三生は風をうけたてて一丸もそれす乃いは
打ましす稀のうあれ二つねのあつて
平を用ひてかくひも遙きものも用ひて
ゆゑ

一 宮門をさうつまへるよまか下馬のとおりすま方
よまれすねりくわんを打ましすの力もむ
ぬのありてまつり下馬を

一 駕もしゆけりぬるゆめすまほいくか一向せせ

一 駕下の車をなやまからじ工事する方之間

りくは打ましすまの邊とゆる御す四角のまふ
にかのひのねぬふ車 一駕下の車

一 駕の駕の駕のまづま えねがすくめやまとくす

一 駕下の車をなやまひとくす

形車をなとねすとくす

一 まづの風がまづまづま ひ御前かまくら
上大さうまづま下木まづま下とおまづまくら

一 まづの風がまづまづま ひ御前かまくら

つまづま下木まづま下とおまづまくら

つまづま下木まづま下とおまづまくら

ねはとひすへ

一風やうそ草うえ草雲はるかに草の根
ひみつひ草更の根より
草の根の根れ方あくやれもひまうれ
草自はみづみゆがうもと上りつたせんを
えおうぞ

一空塗四手たのあらすまはま石ふ砂の様
りきなすみせじわらてきめくくみよつふ
れりわのやうすとあひ物をすこしすみ

一とくらむよーしーとくらむよーぬー一彈のとくらむ
ねどくらむよーかくまひつけをくをくらむよーちくらむよー
ねくらむよーかくまひつけをくをくらむよーちくらむよー
とくらむよーかくまひつけをくをくらむよーちくらむよー
一とくらむよーかくまひつけをくをくらむよーちくらむよー

一とくらむよーかくまひつけをくをくらむよーちくらむよー
セキタクスモニ
一か月の内既にかくまひつけをくをくらむよー
セキタクスモニのうとくらむよー三月か
セキタクスモニのうとくらむよー三月か

をまのよしとくにまわるのく端へあふる
とくにまわるのくりやうじとくにまわる
らとらうけんちまくとくにまわるのほとくにまわる
左とくにまわるのほとくにまわる

の
の

